國學院大學学術情報リポジトリ

古代の歌と歴史叙述

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2023-02-13 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: Fukuzawa, Takeshi メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.57529/00002476

福沢 健 著

古代の歌と歴史叙述

おうふう

古代の歌と歴史叙述

目　次

序論　古代の歌と歴史叙述　7

第一部　『日本書紀』における歴史叙述……21

第一章　推古紀二十一年条片岡遊行説話の聖徳太子像　23

第二章　行路死人歌の発想　40

第三章　「片岡」考　55

第四章　推古紀と蘇我馬子の上寿歌　69

第五章　孝徳紀大化五年三月是月条の語るもの――建皇子の母の死を語る物語――　81

第六章　飛鳥川漲らひつつ行く水の――紀一一八の表現と歴史叙述――　98

第二部　『万葉集』巻二における歴史叙述……107

第一章　大津皇子歌群の形成　109

第二章　2一一〇の仮託性――「大名児」を中心として――　123

第三章　大津皇子歌群の語るもの　145

第四章　有間皇子歌群の形成　163

第五章　有間皇子自傷歌の語るもの　178

第六章　13三二四八の表現――巻十三相聞部長歌の方法――　192

第三部　藤原京の「風流」……209
第一章　石川女郎・大伴田主贈報歌と藤原京――「風流」と「遊」――　211
第二章　夏の香具山――『万葉集』一二八考――　228
第三章　藤原宮役民作歌の「神ながら」　243
第四章　「神ながら　神さびせす」考　263
第四部　行幸空間における「風流」……281
第一章　遊猟の歌――『万葉集』一三考――　283
第二章　温泉行幸の歌――『万葉集』一八考――　301
第三章　温泉行幸の歌――『万葉集』一一〇～一二考――　324
第四章　柿本人麻呂留京三首と伊勢行幸　338
第五部　平城京の「風流」……355
第一章　平城京の「風流」　357
第二章　礼的秩序の風景――『懐風藻』六九及び『万葉集』16三八二九における食の描写について――　374
第三章　秋の野を憶ふ歌　395
第四章　万葉集における「鹿」のイメージの変遷――「精霊」の鹿から「風流」の鹿へ――　407

初出一覧　419
あとがき　423
索引（引用歌・漢詩索引・引用文献索引・研究者索引）　426

古代の歌と歴史叙述

序論　古代の歌と歴史叙述

本書の目的は、『日本書紀』や『万葉集』巻一・二を取り上げ、そのテクストの語る「歴史」とはどのようなものかを明らかにし、「歴史」を載せるテクストの「意図」を分析することである。「歴史」を考察するためのキーワードとして、まず「歴史叙述」を挙げたい。「歴史叙述」とは、ある時点のある視点を持った記述者による「想起」によって、「歴史」を記述する行為である。野家啓一「物語としての歴史――歴史哲学の可能性と不可能性――」（『物語の哲学』岩波書店、二〇〇五、初出一九九三）は、「歴史哲学のテーゼ」として六つの項目を挙げているが、その中で本書の論旨と密接に関わると思われる（1）（2）（3）を次に挙げる。

（1）過去の出来事や事実は客観的に実在するものではなく、「想起」を通じて解釈学的に再構成されたものである［歴史の反実在論］

（2）歴史的出来事（Geschichte）と歴史叙述（Historie）とは不可分であり、前者は後者の文脈を離れては存在しない［歴史の現象主義］

（3）歴史叙述は記憶の「共同化」と「構造化」を実現する言語的制作（ポイエーシス）に他ならない［歴史の物語論］

野家の挙げたテーゼを、『日本書紀』や『万葉集』巻一・二に即して言えば、（1）『日本書紀』『万葉集』巻一・二には、これらの書物が編集された時代、すなわち、七世紀～八世紀はじめという「今」から「想起」された「歴史」が記されている。（2）その「歴史」とは、「今」の価値観によって記述された「歴史叙述」によって、はじめて姿を現す。（3）この「歴史」とは、編集された八世紀はじめの日本において「共同化」「構造化」が行われ、「今」の権力の正当性を保証している。『日本書紀』『万葉集』巻一・二において、それぞれの「歴史」をそれぞれが「叙述」することによって、「今」における「歴史」の「共同化」「構造化」が行われる。「共同化」「構造化」とは、「古代国家」の起源を語る「歴史」が世間に流通・浸透して承認されることを言う。「共同化」「構造化」によって、「今」の「国家」の権威は保証されるのである。

『日本書紀』の歌を「歴史叙述」との関連から読み直す試みとして、大久間喜一郎・居駒永幸編『日本書紀【歌】全注釈』（笠間書院、二〇〇八）がある。『万葉集』巻一・二を「歴史」として読み直す試みとして、小川靖彦「『万葉集』という書物――「やまと歌」による〈歴史〉の創造」（『万葉集　隠された歴史のメッセージ』角川選書、二〇一〇）、神野志隆光「歴史としての『万葉集』――巻一、二がつくるもの」（『万葉集をどう読むか――歌の「発見」と古代世界』東京大学出版会、二〇一三）、影山尚之「万葉集巻二相聞部の構想」（『国語と国文学』八八―一二、二〇一一）がある。以上の業績は、古代の「歌」を、テクストの中で読み、テクストの意図を考察するという立場に立脚するものである。本書もその驥尾に付して、古代の「歌」の描く「歴史」とその意図を考察していきたいと考える。第一部「『日本書紀』における歴史叙述」では、歌と散文と一体となって「歴史叙述」を形成している『日本書紀』の「歌」がどのような方法で「歴史」を叙述しているかを考察していく。第二部「『万葉集』巻二における歴史叙述」では、『万葉集』巻二に載せられる大津皇子歌群と有間皇子歌群を取り上げながら、巻二の語る「歴史叙述」の意図を考察した。

本書では、「歴史」を分析するもう一つのキーワードとして「風流」を取り上げる。クリフォード・ギアツ（小泉潤二訳『ヌガラー19世紀におけるバリの劇場国家』みすず書房、一九九〇）は、バリ島の歴史の分析を通して、バリの国家は「劇場国家」であると定義し、「この国家では王や王侯達はインプレッサリオ（総支配人＝仕掛け人）であり、司祭達は演出家であり、縁の下の力持ちである農民達は、舞台上の構成員であり、聴衆である」と説いている。「劇場国家」という概念はバリ島に限定されるものではなく、様々な時代・様々な地域の国家の分析に有効である。王及びその臣民は、国家という劇場においてそれぞれの役割を演技することを通して、支配・被支配の権力関係を再生産する。本書が中心的に扱う初期万葉の時代（七世紀の日本）に現れた「古代国家」においても、この劇場性は指摘することができる。「風流」は、礼的秩序の都として建設された「都」と深い関係を有する。劇場国家の舞台「都」における「演技」の規範が「風流」である。『万葉集』巻一・二の描く「風流」の「歴史」を辿ることによって、劇場としての「古代国家」がどのように描かれているかを明らかにすることができるだろう。

第三部「藤原京の「風流」」では、礼的秩序の「都」である「藤原京」の建設と「風流」について見ていく。「藤原京」は、『周礼』考工記に記される方形の都市プランに基づいて建設された。この都市プランが「礼」と名の付く書物に載せられていることから明らかなように、藤原京は「礼的秩序」の空間として表象されたものである。「礼的秩序」の空間である「藤原京」において活動する人々は、その空間にふさわしい演技のための規範が求められた。その規範としての「風流」について、「礼」をキーワードして考察した。第四部「行幸空間における「風流」」は、「行幸」の空間における「風流」の「歴史」を、「好色」をキーワードとして考察した。「藤原京」建設以前の「行幸」では、「礼」を逸脱することによって権力を表象する「好色風流」が主流であったことを、斉明朝に特徴的に現れる「温泉行幸」に注目して述べた。第五部「平城京の「風流」」では、「平城京」という新しい「都」において、「風流」がどのように受け継がれたかを「礼的秩序」「好色風流」をキーワードとして考察した。第五部で取り扱う対象は、『万葉集』巻一・

二からは離れるが、巻一・二の「歴史」が到達するべき秩序の世界の表象としての「平城京」の姿を明らかにした。

ここで改めて確認しておきたいことは、「歴史」とは、歴史事実そのものではなく、ある時点からの「想起」を通じて解釈学的に再構成されることによって生み出されたものである。本書が取り扱う『日本書紀』や『万葉集』巻一・巻二で語られる「歴史」も、ある時点（その書物が編集された「今」）からの「想起」によって生み出されたものである。したがって、本書は『日本書紀』や『万葉集』巻一・巻二の記述を通して、隠された歴史事実を発掘しようとするものではない。『日本書紀』や『万葉集』巻一・巻二が語るところの「歴史」とは、どのようなものとして記述されているかを、明らかにすることを目的とするものである。

以下、各論考の概要を述べる。

第一部　『日本書紀』における歴史叙述

第一章　推古紀二十一年条の聖徳太子像

『日本書紀』推古天皇二十一年一二月条の聖徳太子の片岡遊行説話について、庚午朔条と辛未条とに分けて検討した。片岡遊行説話で描かれている太子の姿は『史記』封禅書に見えるような神僊思想を用いて、太子を聖天子に擬そうとした。片岡遊行説話に載せられる紀一〇四は、『万葉集』の行路死人歌と類似する表現を持つ。行路死人歌が、死者の妹・妻を思い起こしながら死者に対する同情をうたうのに対して、紀一〇四は「親無しに　汝生りけめや　さす竹の　君はや無き」とあるように、死者の親や主君を思い起こしながら死者に対する同情をうたうかたちになっている。この表現は十七条憲法の第一条に「是を以て、或いは君父に順はず」と対応するもので、この表現によって、紀一〇四は行路死人歌の類型から脱して、理想の世界が達成できない為政者の悲しみをうたうものへと変わっている。紀一〇四は、散文と一体になって理想の君主である聖徳太子の姿を描いている。

第二章　行路死人歌の発想

この論考では行路死人歌の表現の様式と内容について述べた。『万葉集』の行路死人歌の表現に「荒ぶる神」を意識した詞章が多く見られることを指摘し、そこから、行路死人歌において、死者は神讃美のための景として取りあげられ、その死者をうたうことによってその土地の「荒ぶる神」の威力を称え、無事な通過が祈念されるものであることを述べた。紀一〇四が行路死人歌の類型から外れていることを述べるために、行路死人歌の類型とはどのようなものであるかを考察した。

第三章　「片岡」考――推古記二十一年片岡遊行説話の聖徳太子像――

推古紀二十一年条では、聖徳太子は片岡で真人に出会ったと記されている。ここから、片岡は神僊と出会うような神聖な土地であることが推測されるが、何故その神聖な山が片岡と呼ばれるのか、または片岡とはどのような土地かという点については明確ではない。そこで、この論考では、「片岡」「片山」「片岡山」について検証することで、「片岡」の地形と神聖な土地とされた理由について考察した。

第四章　推古紀と蘇我馬子の上寿歌

この論考は、紀一〇二を取り上げ、従来「新しさ」として指摘されてきた紀一〇二の詞章に見られる臣下意識・天上性は、いずれも十七条憲法第三条の「君をば天とす。臣をば地とす。天は覆ひ地は載す。四時順ひ行ひて、万気通ふこと得。地、天を覆はむとするときは、壊るることを致さむ」にある「君」＝「天」・「臣」＝「地」という理念の実現を示すものとして、うたわれたものであることを述べた。紀一〇二が天皇に匹敵する権力を持つとされる蘇我馬子によってうたわれたと記すことによって、推古紀は推古朝の絶頂として二十年正月七日条を位置付けている。さらに、紀一〇二と十七条憲法との関係性は、推古朝の絶頂が聖徳太子の領導によってもたらされたことを、推古紀が強く主張していると理解されることを述べた。

第五章　孝徳紀大化五年三月是月条の語るもの――建皇子の母の死を語る物語――

紀一一三・紀一一四は、万葉の挽歌史において、抒情挽歌の嚆矢として取り上げられてきた。この論考では紀一一三・紀一一四を取り上げ、この歌の持つ所謂「抒情性」と孝徳紀の散文の歴史叙述との関連性について考察した。紀一一三・一一四でうたわれる中大兄皇子の造媛に対する深い思いとは、建皇子の母の死を語ろうとする『日本書紀』の歴史叙述の中で要請されたものである。孝徳紀大化五年三月是月条によって、建皇子は、中大兄皇子（天智天皇）に最も愛された妃の生んだ子としての位置を与えられる。最も愛された妃の子であるがゆえに、建皇子が中大兄皇子（天智天皇）に最も愛された子であるということを『日本書紀』は語ろうとしているのである。『日本書紀』は建王の正統性を、父である皇太子中大兄皇子と祖母である斉明天皇の愛情という感情によって証明しようとした。このときに必要とされたのが、中大兄皇子や斉明天皇の強い悲しみを表出する紀一一三・一一四であった。紀一一三・紀一一四の「抒情性」とは、孝徳紀の散文の「歴史叙述」によって要請されたものであった。

第六章　飛鳥川漲らひつつ行く水の――紀一一八の表現と歴史叙述――

この論考では、紀一一八が独自な序詞を持つ理由について、「歴史叙述」の側の要求から考察した。斉明紀四年条は、六首の悲傷歌によって、斉明天皇の建王に対する愛情の深さを語る。悲傷歌が殯宮以外の場でもうたわれたと記されることによって、天皇の愛情の深さは強調される。斉明天皇の愛する孫を失った悲しみという「個的」な感情にかたちを与えるために、「個的」な感情を表出する歌の文体が求められた。『日本書紀』が建王を特別に取り上げるのは、同母姉の鸕野皇女（持統天皇）と関係する。建王が皇太子中大兄皇子（天智天皇）の正統な後継者として取り上げられれば、鸕野皇女も天智天皇の正統な後継者となる。鸕野皇女の血統的な卓越性は、皇女の天武天皇后妃の中における地位の卓越性を保証すると共に、その皇子である草壁皇子の正統性をも保証する。紀一一八が独自な序詞を用いて斉明天皇の「個的」な心情（愛する孫を失った悲しみ）をうたうのは、紀一一三・一一四と同じく、斉明紀の「歴史叙述」に

よって要請されたものであった。

第二部　『万葉集』巻二における歴史叙述

第一章　大津皇子歌群の形成

この論考では、大津皇子歌群2一〇五～一一〇の形成過程について、題詞の書式から考察した。一〇五～一〇六・一〇九の題詞は「作歌」となっているのに対して、一〇七～一〇八の題詞は「歌」と記される。「歌」と記されるグループは石川女郎と関わるものであり、この石川女郎歌群が加わることで、大津皇子歌群ははじめて物語性を持つことを指摘した。一〇五～一一〇の物語性は、『万葉集』の外部にある大津皇子の口承の物語（歌語り）によるものと考えられてきたが、巻二相聞部の編集作業の中で形成されたものであると理解される。

第二章　『万葉集』2一一〇番の仮託性――「大名児」を中心として――

第一節の補論。一〇五～一一〇の「物語性」が巻二相聞部の編集作業の中で生み出されたとすると、歌群の中の個々の歌は実際に大津皇子・石川女郎・草壁皇子の歌であろうかという疑問が生じる。ここでは、一一〇の初句に「大名児」という人名がうたいこまれている点に注目し、万葉集中で他に人名をよみこむ歌の例から見て、一一〇が仮託・創作された可能性が高いことを述べた。所謂「記紀歌謡」の狭義の「物語歌」の手法が万葉集の歌の中に見いだせるかを検討した。

第三章　大津皇子歌群の語るもの――歌集が織りなす歴史――

この論考では、大津皇子歌群の形成が『万葉集』巻二編集のレベルであることを確認した上で、大津皇子歌群の語ろうとすることと、この歌群が巻二相聞部持統朝の冒頭に置かれた意味について、特に巻二相聞部の「歴史叙述」の問題として考察した。巻二相聞部に示されている歴史認識とは、持統朝は天智朝・天武朝を継承するものであるとい

うものであった。このような歴史認識の下に、天智天皇・天武天皇の両方の血統を引く皇子・皇女が名を連ねる。その筆頭として巻二相聞部冒頭に置かれているのは、最も正統である皇子同士の妻争いを語る大津皇子歌群であった。大津皇子歌群において特徴的なのは、「竊」という字が用いられていることである。大津皇子歌群は、「竊」を用いることによって、大津皇子の恋が反道徳的なものとしてとして意味づけている。「竊」によって表される反道徳的な「恋」が皇子の即位を阻む条件として納得され得るものであったことは、允恭紀二十三年条に、木梨軽皇子の同母妹軽太娘皇女との「竊通」によって、太子は即位を阻まれたとする記事があることから分かる。大津皇子歌群において、大津皇子と石川女郎との「婚」は「竊」によって反道徳的なものとして位置づけられ、大津皇子はその反道徳的な行為によって、天皇として即位するにふさわしくないことが語られているのである。『万葉集』巻二相聞は、大津皇子歌群を持統朝の冒頭に置くことによって、草壁皇子中心の体制とは、天武天皇の遺志を継承するものであることが再確認される配列を取っているのである。

第四章　有間皇子自傷歌の形成

この論考では、『万葉集』巻二挽歌の冒頭に置かれる有間皇子自傷歌（2一四一～一四二）の形成過程について考察した。2一四一～一四二の内容を検討すると、謀反に失敗して護送される有間皇子固有の心情は窺いにくいことを指摘し、この二首が旅の折りに詠まれた歌（必ずしも有間皇子の歌であるとは限らない）が自傷歌として転用されたものであることを述べた。

第五章　有間皇子自傷歌の語るもの――歌集が織りなす歴史（その2）――

この論考では、『万葉集』巻二挽歌が、有間皇子自傷歌（2一四一～一四二）に続くかたちで追悼歌群（2一四三～一四六）を載せていることの意味を、巻二挽歌部の「歴史叙述」の問題として考察した。『万葉集』巻二挽歌が、有間皇子自傷歌と追悼歌群とを並べる意味は、斉明四年紀伊行幸・持統四年紀伊行幸・大宝元年紀伊行幸を関連付け

るためであると考えられる。斉明四年紀伊行幸は「温泉行幸」として企画されたものであったが、『日本書紀』斉明天皇条においては有間皇子謀反事件・建王薨去と関連付けてこの行幸に政治的な意味を付加している。有間皇子謀反事件によって、非天智系の皇統は正統でないことが確認され、建王が大きく取り上げられることによって、建王の同母姉である大田皇女・鸕野皇女の生んだ皇子が正統であることが確認された。このような政治的な意味を背景として、鸕野皇女の孫である珂璃王（文武天皇）を正統であると認定するために持統四年紀伊行幸が企画され、文武天皇の即位に際してその正統性を再確認するために大宝元年紀伊行幸が企画された。『万葉集』巻二挽歌は、有間皇子自傷歌を冒頭に置くことによって、文武天皇の正統性を主張しようとしているのである。

第六章　13三二四八番歌の表現――巻十三相聞部長歌の方法――

この論考では、三二四八番歌は『万葉集』巻一三に載せられている。本章で取り扱った大津皇子歌群や有間皇子歌群とは直接関係しないが、本論は歌が外部に「物語」を持つことと歌の表現との関係性を考察したものであることから、方法論として関連するものと考え、ここに載せた。巻十三の相聞部の長歌は、記紀歌謡と連なる伝承歌であると従来考えられてきたが、これらの歌は相聞長歌という形式を意識して万葉後期に作られた歌であることを述べた。巻十三相聞部における長歌がどのような方法で作られているかという点については、三二四八番歌とその類歌である四八五番歌との比較を通して考察し、恋歌の類型表現を集めることであると述べた。類型的な表現を集めることで、「物語」性を排除するという方法は、類型から外れる表現を用いることで、「物語」性を獲得しようとする4四八五の方法と対極にあるものである。

第三部　藤原京の「風流」

第一章　石川女郎・大伴田主贈報歌と藤原京――「風流」と「遊」――

劇場国家の「都」に住む人々は都にふさわしい人間として振る舞わねばならなかった。この振る舞いの規範が「風流」である。「風流」は時代によって変化する。その内容を大別すると、「礼」を守ることを求めた「風流」と、「好色」であることを求めた「風流」とがある。「礼」を守ることを求めた「風流」は儒教的であり、「好色」であることを求めた「風流」は道教的であった。本章では、藤原京にふさわしい「風流」とは何かを問答する石川女郎・大伴田主贈報歌（2一二六～一二七）を取り上げて、藤原京が礼的秩序の空間として表象されていることを述べた。

第二章　夏の香具山――『万葉集』1二八番歌考――

この論考では、「藤原京」が作られたとき、礼的空間へと景観がつくり変えられていったことを、香具山を取り上げることによって考察した。1二八は季節の推移をうたう歌の嚆矢となる。持統朝に季節の推移をうたう歌が登場した理由として挙げられるのは、持統朝における暦法の施行である。暦法の施行によって春夏秋冬の四時観が生まれ、季節の推移をうたう歌が生み出される。時間の再編成と共に行われるべきは、空間の再編成である。四時の運行を正しく守る政治を行うためには、時間と同様、空間も秩序あるかたちに再編成しなければならなかった。それが「藤原京」の建設である。五二は、「大和の　青香具山は　日の経の　大御門に　春山と　繁さび立てり」とあるように、香具山について「青」「春山」であるとしている。香具山が「青」「春山」であるのは、東（日の経）の大御門であることと関わる。陰陽五行説によれば、木―東―青―春、火―南―朱―夏、土―中央―黄―土用、金―西―白―秋、水―北―玄―冬というように、五行（五材）にはそれぞれの特性を象徴する方位・色・季節などが定められている。大極殿の東に位置する香具山は、五行説に基づき「青」「春山」として再編されたのである。

第三章　藤原宮役民作歌の『神ながら』

この論考では、「藤原宮の役民の作る歌」（1五〇）は、藤原京が「神」として地上世界を統治する天皇によって生み出されたとうたうことを、この歌の「神ながら」を取り上げて考察した。五〇の「神ながら」は、人麻呂の「神な

がら　神さびせす」（一三八）を継承したと考えられているが、三八の「神ながら　神さびせす」と大きな違いがある。五〇の「神ながら」は、地上世界を統治しようと天皇が思い、その天皇の思いに答えるかたちで人民が奉仕する様を「神ながら」とうたっている。天皇の神性をア・プリオリなものとしてうたう五〇の「神ながら」の用法は、平城京に現れた宣命の先駆けとなる。礼的秩序の都である「藤原京」の中心たる天皇の姿を描こうとするとき、地上世界に君臨する新しい「神」としての天皇像が生み出されたのである。

第四節　『神ながら　神さびせす』考

この論考は、三八の「神ながら　神さびせす」を扱って、「藤原宮の役民の作る歌」の「神ながら」と大きな違いがあることを述べた。「神ながら　神さびせす」は、持統天皇が地上に「神の世界」を出現させ、「神の世界」の出現に「うつせみ」の「おほきみ」の力を認め、天皇を「神」とたたえる詞章である。一方、天皇は、「神の世界」の出現という奇跡によって、「神」となるのであって、五〇のように、天皇の神性はア・プリオリなものとしてうたわれていない。五〇の「神ながら」の用法は、『続日本紀』の宣命の用法へと連なるものである。

第四部　行幸空間における「風流」

第一章　遊猟の歌――『万葉集』一三考――

本章では、舒明天皇宇智野行幸に際してうたわれた中皇命の宇智野遊猟歌二首（一三～四）を取り上げ、この歌が「遊猟」に参加した女たちによって共有された歌であることを述べた。中皇命は、女たちを代表して大王への恋情をうたった。恋は非日常性の象徴である。狩猟の場に女たちが姿を見せるのも「遊」であり、狩場に立つ大王の姿を女たちの恋によって飾り立てることもまた「遊」であった。三では、女たちの恋情によって、大王の権力を表象している。行幸に参加する女たちの恋が大王の権力を表象することは、第一章第一節で述べた「好色風流」と関連する。

第二章　温泉行幸の歌――万葉集1八番歌考――

第三章　温泉行幸の歌――『万葉集』1一〇～一二考――

この二つの論考は共に「温泉行幸」というキーワードから、斉明天皇の行幸を考察したものである。「温泉行幸」とは、温泉を目的とする行幸で、唐太宗の驪山温湯行幸をモデルとして日本に導入された。八については、左注に「御船西征」とあることから、斉明七年（六七一）の百済出兵に際しての軍船進発の宣言であるという解釈が一般的であるが、軍船進発説では左注の「庚戌、御船、伊予の熟田津の石湯の行宮に泊つ。天皇、昔日より猶し存れる物を御覧し、当時忽感愛の情を起す。所以に歌詠を製りて哀傷したまふといへり」という記述と合致しない。左注を素直に読めば、八は「温泉行幸」の歌であると読める。八番歌は行幸に参加する女たちを代表して男たちに船遊びに誘う歌であり、この歌もまた、三番歌と同様に女たちの恋が大王の権力を表象している。

一〇～一二は、題詞に「中皇命、紀の温泉に往しし時の御歌」とあるように、斉明四年（六四八）の紀伊行幸に際してうたわれた歌である。一〇～一二では、幸福な旅の中で遊ぶ恋人たちの姿が繰り返しうたわれる。旅の歌において「幸福な旅」のイメージが提示されるのは異例である。一〇～一二において「幸福な旅」のイメージがうたわれるのは、女たちの恋が大王の権力を表象するものである。

第四章　柿本人麻呂留京三首と伊勢行幸

舒明・斉明天皇の行幸は恋によって行幸空間が非日常化されたのに対して、持統天皇の行幸は礼的秩序によって行幸空間が非日常化された。この論考は持統六年（六九二）の持統天皇伊勢行幸を取り上げて、礼的秩序によって非日常化された行幸と歌について考察した。持統天皇伊勢行幸は、律令制に基づく初めての天皇行幸であると考えられる。天皇行幸とは、『礼記』王制の「天子五年一巡守。歳二月東巡守、至于岱宗、柴而望祀山川、観諸侯、問百年者、就見之。命大師陳詩。以観民風」に基づくかたちで行われるもので、天子の徳を下流させることを目的とするものである。新

しい天皇行幸の開始に合わせることによって、柿本人麻呂は、連作という形式によって、留守歌に行幸賛美を盛り込んだ新しい留守歌を制作したのである。

第五部　平城京の「風流」

第一章　平城京の風流

第三部で述べた礼的秩序の空間としての「藤原京」というイメージは、それに続いて建設された「平城京」においても継承される。この論考では、「風流侍従」「歌儛所」を取り上げて平城京の風流の変遷を考察した。平城京の風流は、聖武天皇の即位と対応する形で現れた。聖武朝の政治理念とは徳沢流洽であり、主として神亀年間に活躍した風流侍従の活動とは、和楽を用いてその理念を完成に導くことを目的とした。一方、長安の平康坊における好色風流の流行を背景として平城京においても文人たちの間で好色風流は流行する。平城京の風流を概観すると、礼的秩序の風流と好色風流との間で相克があったことが分かる。礼的秩序の風流と好色風流との優劣を競う一二六・一二七は平城京の風流の相克の中から生まれたとするのが理解しやすい。

第二章　礼的秩序の風景――長屋王「初春作宝楼にして置酒す」詩（『懐風藻』六九）及び長意吉麻呂「酢・薑・蒜・鯛・水葱を詠む歌」（『万葉集』16三八二九）における食の描写について――

この論考では、平城京の風流を『懐風藻』六九と『万葉集』三八二九における料理の描写を例に取って考察した。枚乗「七発」や曹植「名都篇」において酒宴の料理は詳細に並べ立てられるのに対して、『懐風藻』『万葉集』には酒宴描写はない。三八二九であるが、この歌で取り上げられている酒宴の料理は座興として提示された歌題であり、酒宴の豪華さの描写ではない。「名都篇」では洛陽の滅びることを知らずにひたすら遊び続ける少年たちの姿が描かれるが、その遊びの中に現れるのが酒宴の豪華な料理である。豪華な料理は贅沢であり、礼的な秩序に反するものであった。『懐風

藻』『万葉集』の宴席の描写は、礼的秩序の空間としてある平城京の表象なのである。

第三章　秋の野を憶ふ歌

第四章　万葉集における『鹿』のイメージ

天平勝宝六年（七五四）秋、大伴家持は「秋の野を憶ふ歌」六首（四三一五～四三二〇）を詠んだ。この歌群の前半三首と後半三首はシンメトリカルなかたちで配列され、均整の取れた美しい世界が描かれる。当該歌群で描かれる秋の野は実景ではない。五年前に退位した聖武天皇の若かりし時に主催した高円宮の宴の様を回想したものである。第三章は、この歌群でうたわれた均整の取れた景が、平城京の礼的秩序の世界を表象するものとして回想されたことを述べた。第四章は、第三章の補足となる論文である。『万葉集』の天皇・皇子の狩をうたった歌において、鹿は大王に服属する野の精霊としてうたわれるのが一般的である。一方、「秋の野を憶ふ歌」に現れる「鹿」は、『万葉集』の四季歌の中で作り出されてきた風流の鹿のイメージを継承するものである。家持が回想の中で描こうとした聖武天皇は、精霊に君臨する古代的な王の姿ではなく、天平期に生み出された季節の新しいイメージによって支えられている、風流の王としての姿で描かれている。家持にとって、風流の王のイメージは、天平の風流によって彩られた平城京に君臨した聖武天皇に最もふさわしいものであった。